

## 地域住民による支え合いの拠点(居場所)づくり支援事業報告

北翔大学 支え合いの拠点(居場所)づくりの支援のための研究・実践グループ

岩本 希 梶 晴美 黒澤直子 佐藤郁子  
本間美幸 八巻貴穂 吉田修大

代表 尾形良子

### はじめに

北翔大学では長年社会福祉専門職の養成を手がけてきており、平成 28 年度内に介護福祉士および社会福祉士養成担当教員の合議により、日頃お世話になっている大学所在地、江別市の社会福祉への貢献活動を行うことを協議し始めた。これまで日々大学教育、資格養成および福祉職の育成に注力してきたものの、江別市の各委員会委員としての委嘱等での参加以外には直接的に貢献を行う活動を担うことはなかった。しかし、大学もその地域社会の一員として社会貢献することが期待される中、授業や業務を抱えながら大学教員が担う福祉実践としては何ができるのか、また適切なことは何かを検討し、それは「居場所づくり」の支援なのではないかという仮説を抱きつつ研究・実践をスタートすることとなったものである。

### 1. 問題意識

要介護世帯における虐待事件の発生や格差社会の顕在化など現代社会の抱える福祉課題は深刻化の一途をたどっている。子育てや介護の負担、そして家族・親族の経済生活の面倒をみること等かつて家族機能に内包されていたさまざまな要素は、核家族化による実質的な世帯人数の減少や共働きの増加をはじめとした家族の変容により、現在の家族には担いきれないことが明らかである。もとより各世帯の個別状況に寄り添うような公助の可能性は、明確な困難を抱えニーズがキャッチされるまでは厳しい側面がある。つまり、「十分に一人で(家族とともに)やっつけていける」という状態と、公的な福祉サービスが必要な状況との「間」の状況が存在し、ここに近隣のつながりによる支え合いの必要性が生まれてくる。もちろん福祉サービスの受け手となった後も近隣からの支え合いは重要となる。しかし現在では「向こう三軒両隣」と助け合う範囲を示すフレーズが通用しないほど、地域において何の取り組みもなければ住民同士が支援し合う可能性にも期待できないことが一般的である。

地域社会の消滅から時間が経過し、お互いに助け合うことができる地域の協働の重要性が何十年の間指摘され続けてきているが、残念ながら未だに創出できていない。国はこうした状況に対処するため、子ども・高齢者・障害者など全ての人々が地域、暮らし、生きがいを共に創り、高め合うことができる「地域共生社会」の実現を掲げ、支え合いながら自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成する仕組みを構築すると謳っている。そのため平成 28 年 7 月に『我が事・丸ごと』地域共生社会実現本部を設置し、「地域における住民主体の課題解決強化・相談支援体制の在り方に関する検討会(地域力強化検討会)」を行って、一億総活躍社会づくりが進められる中、福祉分野においても、「支え手側」と「受け手側」に分かれるのではなく、地域のあらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成し、公的な福祉サービスと協働して助け合いながら暮らすことのできる「地域共生社会」を実現する必要があるとした。

このような中で地域住民自身も超高齢社会を迎え、また子育ての困難な現実の中で支え合える地域づくりの必要性を認識していると考えられるが、既知のようにかつての助け合いが可能であった地域社会やコミュニティはすでに消滅しており、新たに再建することは決して容易なことではない。ここに地域社会、コミュニティを作り直すための機会、その方法や選択肢の検討を行う意義がある。

## 2. 地域の支え合い

### (1) 地域福祉とは

地域の支え合いをどう考えるのかを説明するために、まず地域社会の福祉に関わる「地域福祉」というキーワードを参照する。もともと「地域福祉」という言葉は戦後地域社会の福祉増進という目的概念としての使用を皮切りに、1960年代当初には領域を指し示すための地域社会福祉に移行し、60年代中期に「地域福祉」としての呼称が定着していったとされる。統一見解としての定義は存在していないが、地域福祉の研究者である井岡勉によれば「地域福祉は地域・自治体レベルにおいて、住民の地域生活問題対策の一環として、住民の生活防衛と福祉増進を目的に、住民主体の原則と人権保障の視点を貫き、地域の特性と住民の生活の実態に焦点を当てたヨコ組みの視点に立って、総合的・計画的に展開される公(行政)・民(民間・住民)社会福祉施策・活動の総体<sup>ii</sup>と説明されている。地域福祉の目的は福祉コミュニティの創造と地方自治の実現であり、主体は地域福祉を主として担っていると考えられていた社会福祉協議会だけでなく、老人ホーム等を経営する社会福祉法人や生活協同組合、ボランティア団体やNPO法人、住民団体など対象が拡大されている。その対象は介護や保育のニーズだけではなく、ホームレス、社会的排除、外国人労働者やその家族、さまざまな暴力、つまり児童虐待、ドメスティックバイオレンス、高齢者虐待など、引きこもりなど潜在化したニーズにまで及ぶ。地域福祉の方法・技術としてコミュニティワークやコミュニティソーシャルワーク、権利擁護、ケアマネジメント、住民参加、地域福祉計画等があげられている。この地域福祉の枠組みの中でその対象が広げられつつも限定されている理由としては、社会福祉の問題や課題に対して地域福祉だけでは解決が及ばないことも多く、そこに社会政策が機能するべき側面が存在<sup>iii</sup>するからである。

### (2) 住民主体と参加

地域福祉を担う主体、「誰が担い手か」を考えるために住民の位置づけを確認すると、一つには福祉サービスの受益者としての「利用者」「当事者」としての存在であり、もう一つは住民<sup>iv</sup>自身が地域福祉の担い手となって近隣住民を支えるというあり方である。受益者としての住民が支えられるだけの存在かと言えば、サービスを共に検討し契約締結の担い手というあり方から自らの必要なサービスを選択する主体という含意がある。次に「担い手」としての側面を検討すると、かつての社会と異なり現在では住民同士が課題を共同で解決したりする連帯機能を自らも手放した経緯もあり、現実として連帯機能は失われている。この側面を取り戻し、地域に貢献し住民自治の担い手として「まちづくり」や公共に関わる営みを回復することが市民参加や住民主体という考え方<sup>v</sup>である。地域福祉を推進していくためには地域住民の主体性を育むことが重要であり、アーンスタインの「市民参加の梯子」では参加度合いが薄い方から、1. 世論操作、2. 不満をそらす操作(以上実質的な民意無視)、3. 一方的な情報提供、4. 形式的な意見聴取、5. 形式的な参加機会拡大(以上形式だけの参加)、6. 官民の協働作業、7. 部分的な権限移譲、8. 住民主導(以上住民の権利としての参加)と8つの段階で紹介<sup>vi</sup>している。本研究の関わる「地域の支え合い」は政治的参加を想定したアーンスタインの梯子に直接的に関わりはないものの、活動の中で住民が「主体化」していくあり方の説明になっていると考えられ、4～5 辺りから上位の段階につながっていく可能性のある活動である。一方で地域福祉に限定した住民参加のあり方としては、自治会・町内会等、地縁団体・業種組合を通じた参加、ボランティア・NPOを通じた参加、行政や団体等からの委嘱された委員としての参加、計画策定への参加、資金や拠点提供の参加等に分類することができ、「活動の構想～課題を見つける～理念や目的をつくる～課題の解決・活動～進行管理」といった住民参加のプロセスが構想されている。これを繰り返して実施することによって地域福祉が推進する<sup>vii</sup>ことになる。

### (3) 地域住民の支え合い

ここで「何が支え合いなのか」を限定しておく必要がある。本来、よく引き合いに出される「近隣との切れてしまったお醤油の貸し借り」も支え合いには違いないのであるが、本研究においては地域住民の支え合いを「小地域における住民による地域福祉活動」と限定する。社会福祉協議会では小地域福祉活動として「見守り」と「居場所づくり」をあげている。心配なところがあると感じる近隣の人々を見守り、何かがあった時には専門職の支援につなげる。居場所では交流の場としての機能にも加え、さまざまな身近な地域ならではの情報交換も

有効である。

さて、「支え合い」とは「支える」「支えられる」という双方向の働きを含んでおり、そのために支え合いの主語は「住民」だということが前提である。地域福祉による住民への期待の一つのあり方は「子育ての難しさ」など何かしらの動機付けを得た住民が自らや近隣住民の持つ地域ニーズに気が付き、身近な地域で支え、支える経験をしながらボランティア活動等に成長し、個人を超えた活動の担い手となることである。最近では60歳台の住民が後期高齢者を見守る等の支え手となり、ボランティア活動や有償サービスの担い手として活躍する。その後、自らが80歳台になった時にはその時点の60歳台の住民に支えられるというモデルが描かれるところである。これは経時的な支え合いであるが、「支え手」と「受け手」が同時に成立するモデルには、知的に障がいのある青年が隣の高齢の住民に書類の書き方を教えてもらい、その冬の積雪時に青年が高齢の隣人宅の除雪を手伝うという状況があげられよう。いずれにしても「支え、支えられる」という住民同士の身近な助け合いが成立することが、住み慣れた地域でいつまでも安心して暮らす地域福祉の重要な要素である。

#### (4)居場所とは何か

居場所とは特に定義がないキーワードの一つであり、広辞苑には「いるところ。いどころ」とそのままの意味しか載っていない。かつての井戸端会議の「井戸端」のように、皆が集っておしゃべりを楽しんだり情報交換をするような「場」の代替的な実践である。社会福祉協議会が進めるふれあいきいきサロン、ほかにも〇〇カフェ、〇〇食堂等の名称で実施されている実践が居場所である。

全国社会福祉協議会のふれあいきいきサロンの紹介では「地域を拠点に、住民である当事者とボランティアとが協働で企画をし、内容を決め、共に運営していく楽しい仲間づくりの活動」として、その開催を提唱しているものである。対象は高齢者、障がい者、子育て中の親などのサロンがあり、子育てに関しては、最近では、「ふれあい子育てサロン」という名称も使うようになっていて、平成12年度までに全国で26,000を超えるサロンが運営されていた<sup>viii</sup>。基本的に月1回の実施から開始されることが多かったがその後週1型や毎日型に発展していくところもあり、地域の実情に応じて、また担い手の事情によりさまざまな頻度で行われている。

運営に着目すると「居場所」事業のみを単独で実施しているところ、福祉施設や事業所が本体事業に加えて実施しているあり方や毎日型の居場所が〇〇カフェや食堂も含めて行っている場合もある。また居場所の一つである「地域食堂」の類型化を試みた研究によれば、①ワーカーズ運営型(生協、農協組合員による別活動から発展)、②住民主体運営型(町内会組織等が立ち上げて地域住民が主体)、③個人・有志運営型(5人以内で個人、任意団体による運営)、④母体組織運営型(NPO法人、合同会社等の事業の一つに位置付け)、⑤障がい者就労支援型(社会福祉法人、NPO法人の事業の一環としての取り組み)の5類型に分けられる<sup>ix</sup>とする。

### 3. 江別市の地域アセスメント

かつて社会福祉の方法としてのソーシャルワークは、個人や家族といった単位を支援する現在の「マイクロ・ソーシャルワーク」である「ケースワーク」、当事者集団を支援する「グループワーク」、そして地域社会を支援する「コミュニティワーク」<sup>x</sup>の3つとされていた。しかし現在ではこれらを全て統合し「ソーシャルワーク」の中の要素として考えるあり方を取っており、「地域を基盤としたソーシャルワーク」や日本でもイギリス由来の「コミュニティソーシャルワーク」という呼称によって表現することも多くなってきている。

ところで本研究の「場」は地域社会であり地域住民が対象であるため、社会福祉の方法としてはかつての「コミュニティワーク」、現在の表現としてはコミュニティを対象としたソーシャルワークということになる。実践を行う際には当該地域の概要と特徴を捉えて課題を設定し、実践を計画して実施に至るというプロセスを有しており、本研究の課題を抽出するために行った地域アセスメントを述べる。アセスメントはコミュニティワークの標準的な項目を使用する。

#### (1)江別市の概要

江別市は道央圏の中で札幌市に隣接し、総面積187.38平方キロメートルの広さがある。

## ① 地域の歴史

江別に最初に移住したのは、明治4年、宮城県涌谷領からやってきた21戸76人の農民で、明治11年には屯田兵10戸56人が移住し、同年、明治政府による開拓使府令が布達され江別村が誕生した。その後、各地から屯田兵が入地し、計画的な開拓が進んだ。大正5年に江別町に昇格、昭和29年には市制が施行され江別市が誕生した。昭和30年代後期から40年代にかけて、札幌市への人口集中の影響を受け、隣接する江別でも人口が急増し、文京台地区の大学、その他教育・研究施設の立地、第1工業団地の整備などにより道央圏の中核都市としての地位を築いた。平成3年には、人口10万人を達成。平成26年には市制施行60周年を迎えている<sup>xi</sup>。

## ② 環境

□行政による地域の分け方

通常は中心部「野幌地区」、札幌市に隣接している「大麻地区」と東部の「江別地区」の3つに分けている。一方で江別市都市計画マスタープラン2014(改訂版)による「地域別構想」の地域区分は、地域に応じて多種多様な特性を有する市街地やその周辺部を範囲とし、地域の歴史、発展の形態、地理的条件、これまでの形成経過や住区構成などを踏まえて、江別地域、野幌地域、大麻・文京台地域、豊幌地域、農村地域の5地域に分けて、地域づくりの基本的な方針を定める」としている。

[江別地域]

江別地域は、江別、野幌、大麻・文京台と連なる市街地の東端に位置し、石狩川、千歳川などの自然環境が身近にある市内で最も古い歴史を持つ地域である。主な土地利用は、江別駅周辺の古くからある商業地や住宅地、その周辺に緩やかに住宅建設が進む新興住宅地や王子から工栄町、角山にかけての工業地となっている。地域内には王子に製紙工場、工栄町、角山には製造、加工、流通業などが立地する工業団地がある。また、北海道縦貫自動車道などの都市間を結ぶ広域幹線道路や、江別太地区には江別東インターチェンジを有していることから、交通利便等の高い優位性がある。

[野幌地域]

野幌地域は市街地の中央に位置し、野幌駅周辺には商業業務施設や公共施設などが集積する江別の中心を担う地域として発展している。野幌駅周辺や幹線道路沿道の商業地、その後背の住宅地、近年、住宅建設が進む郊外の新興住宅地、西野幌の先端技術系企業や研究機関等が立地する工業地となっている。野幌駅周辺には、マンションや商業施設、公民館、市民体育館、情報図書館などの各種公共・公益施設などが数多く立地し、その周辺には大規模店舗が立地するなど、江別市で最も人口や利便施設、都市内の幹線道路等が集中している。また、野幌グリーンモールや東西・駅南グリーンモールの整備、歩行・自転車空間のバリアフリー化などを進めており、「歩いて暮らせるまちづくり」を促進するとともに、交通環境の優位性を活かした地域づくりが重要となっている。

[大麻・文京台地域]

大麻・文京台地域は、市街地の西端に位置し、計画的に造成されたゆとりある成熟した住宅地や道立図書館、大学など高等教育機能が集積するなど、江別市の居住・教育・研究機能の中心となる地域であり、大麻地域の昭和39～46年度にかけて計画的に造成された中層集合住宅と戸建住宅の住宅地、近年、土地区画整理事業によって開発された戸建住宅地、文京台地域の学生が多く居住する住宅地及び大学や研究機関が立地する文教地区となっている。

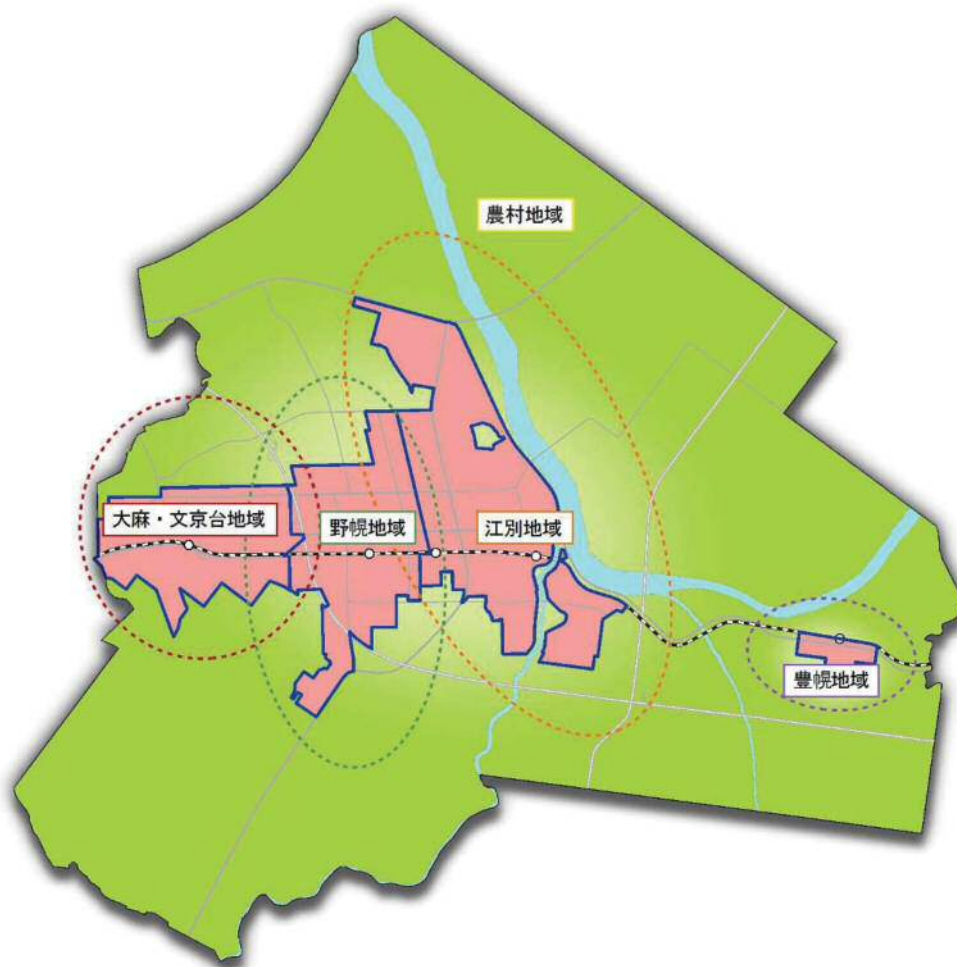
[豊幌地域]

豊幌地域は、市街地から夕張川を隔て、豊幌駅周辺の国道12号南側に位置し、社会福祉施設が立地するなど良好な自然環境を有する、周辺を農地に囲まれた飛び地の市街地を形成している。

[農村地域]

市街化調整区域にある農村地域は、食料生産基地としての農地、良好な自然環境を維持する森林や河川敷地のほか、農業集落地や幹線道路沿道などで構成されている。市街地を取り囲むように位置しており、都市部近郊でありながら豊かな自然環境を有する、江別市の農畜産業を支える地域である。<sup>xii</sup>

(図 江別市都市計画マスタープラン 2014(改訂版)「第 5 章地域別構想」による地域の分け方より引用)



□地勢および地質

江別市は石狩平野の中央部に位置し、全般的に平坦な地勢を形成している。野幌丘陵と古砂丘の起伏があるほかは市域の大部分に低地が広がっている。標高の最高は野幌丘陵南端部(西野幌)で93.0メートルで、最低は北東部低地帯(豊幌)2.5メートルである。石狩川が市内を北東から西に流れており、途中、夕張川、千歳川、豊平川、篠津川等の支流河川が合流する<sup>xiii</sup>。

□気候

世界の気候区分によると本州が「温帯」に属するのに対して北海道は「冷帯(亜寒帯)湿潤気候」に属する。道内は道南・日本海沿岸・太平洋沿岸・オホーツク海沿岸・内陸の 5 つのエリアに区分される。江別市は日本海沿岸地域に属し、夏は晴天が多く日本海を流れる対馬海流の影響で気温も高めとなっている。一方で

冬期には北西の季節風の影響で風が強く降雪量は多めである。

平均気温は過去 10 年間(平成 19 年～28 年)では 7.5 度、最高気温は昭和 51 年、平成 18 年、19 年に記録した 34.5 度、最低気温は昭和 52 年にマイナス 27.7 度であった。降水量は 7 月から 9 月に掛けて雨量が多く、1 日の最高雨量は昭和 61 年に記録した 119 ミリメートルである。積雪は日本海側北部や沿岸部ほどではないが全道的には多いとされる。平年で 11 月から 4 月上旬まで降雪があり、最深積雪量は過去 10 年間の平均は 116 センチメートルであるが平成 25 年 2 月 21 日に 167 センチメートルを記録し、ここ数年は平年と比較して多いといえる。風は日本海側の石狩湾と太平洋側苫小牧まで石狩平野を縦断するような風が多く、風をさえぎる山地がないことから 1 年を通して風の通り道となっている。南東の風が吹いており、江別付近の風が強いといわれる。特に 4 月～5 月頃に掛けて復強風に特徴をみることができる。北西の風は 10 月から 5 月まで続き、地吹雪や暴風雪を起こすこともある<sup>xiv</sup>。

#### □産業構造

平成 24 年 2 月 1 日現在の「経済センサー活動調査」による産業調査によると、調査対象に農業、林業、漁業に属する個人経営の事業所を含まないため、実態を現し切れていないという限界はあるものの以下に示す。総事業所数 3409 件中、農林漁業は 43 で 1.3%、非農林漁業は 3366 件で 98.7%を占める。上位 1 位は「卸売業、小売業」で 750 件で 22.0%であり、2位は「建設業」411 件、12.1%、3 位が「宿泊業、飲食サービス業」346 件、11.9%である。4 位は「医療、福祉」349 件、10.2%、5 位は「生活関連サービス業、娯楽業」で 346 件、10.1%<sup>xv</sup>であった。

#### □住宅状況

江別市の宅地造成は増加しており、また平成 27 年 10 月 1 日の持ち家に住む世帯は 51,905 世帯のうち 33,688<sup>xvi</sup>世帯である。これは札幌市の統計は平成 25 年のものではあるが、居住世帯のある住宅数を住宅の所有の関係別にみると、「持ち家」は 424,290 戸で住宅全体(861,030 戸)に占める割合は 49.3%<sup>xvii</sup>となっている。札幌のデータは 2 年ほど古いものではあるが、比較して 64.9%以上となる江別市の持ち家率が高いことが分かる。

#### □交通機関

江別市内には大麻駅、野幌駅、高砂駅、江別駅、豊幌駅等 JR 北海道が通っており、JR 北海道バス、北海道中央バス、ゆうてつバスが多数の路線バスを走らせている。しかし住民の移動手段は自家用車が中心であり、自動車保有台数は増加<sup>xviii</sup>している。

#### □交流の場(公園、公民館、ショッピングセンター等)

公園は平成 24 年からほとんど増えていない。公民館は江別市中央公民館・コミュニティセンターには多目的ホール、研修室や会議室等があり住民が利用している。その他、野幌公民館、大麻公民館(えぼあホール)がある。また身近な集会施設として「住区センター」が江別市区画整理記念会館 朝日町、江別元町地区センター 元町、野幌公会堂 野幌代々木町、野幌鉄南地区センター 東野幌本町、大麻東地区センター 大麻東町、文京台地区センター 文京台、豊幌地区センター 豊幌、大麻西地区センターと 8 か所ある。ショッピングセンターは国道 12 号線沿いに駐車場つきのイオン等がある。

### ③ 地域住民～人口動態～

江別市の 2017 年 10 月 1 日現在の人口は 118,979 人で、約 10 年前より少しずつ減少している。北海道新聞 2018 年 1 月 13 日朝刊の記事によれば、少子高齢化で亡くなる人の数が生まれる人を上回る「自然減」が続いているが、江別市は 2016 年度に開始した子育て世帯向けの住宅取得支援制度などの影響で、2016 年度から転入者が転出者を上回る「社会増」となっている。道内の市町村を人口規模で見ると、昨年度末現在の住民基本台帳に基づく人口では小樽市を抜き、江別市が道内 7 位となった。

また江別市の年少人口は 11.2%、生産年齢人口は 59.6%、老年人口は 29.1%<sup>xix</sup>となっていて年々高齢化が進行している。

### ④ 住民組織・団体～住民組織・団体への入会状況～

自治会への加入率は平成 28 年度で 69.4%と 4 年前と比較して約 3 ポイント減少している。自治会数は 1 件減少して 161 であり、住居地に自治会がない場所も存在している。また高齢者クラブ連合会のクラブ数は

平成 28 年、29 年と 66 と増加しているが、会員数は 80 名程度減少<sup>xx</sup>している。

### ⑤ 情報の伝達・コミュニケーション～地域情報誌・回覧板～

「まんまる新聞」は広告掲載の各スポンサーの提供による地域生活情報紙である。配達部数は、江別市域：49,084 部・厚別区域(含む西の里・平岡公園東)：60,268 部、合計：109,352 部(2018年4月2日号現在)発行<sup>xxi</sup>されている。回覧板は自治会の班ごとに逐次回覧されており、住民の情報源となっている。

## (2)江別市の居場所の状況

江別市の社会福祉に関係する情報のうち、ここでは本研究の中心的な関心である地域住民のための利用自体が制度に則らず、自由に行くことができる「居場所」に関わる事項に焦点化して紹介する。

### ① 児童領域(若者含)

#### □児童センター

児童センターとは児童生徒が自由に来館し、スポーツや読書などの自由な活動を通じて仲間づくりをする施設で、江別市内には 7 か所(東光児童センター 東光町、麻の実児童センター 大麻東町、萩ヶ岡児童センター 萩ヶ岡、森の子児童センター 文京台、東野幌青少年会館 野幌東町、大麻西小ミニ児童館 大麻扇町、野幌ひまわり児童センター 野幌代々木町)ある。

#### □子ども食堂「ここなつ」

「ここなつ」は、大麻銀座商店街の江別港にて毎週金曜日の 17:30～20:00、札幌学院大の学生が主体となり運営されていた子ども食堂であったが中心となる学生の卒業により現在休止中である。

#### □「江別港」

若者が社会を変える仕組み作りを行いたいと平成 25 年から「江別港」の活動が始まり、NPO法人を取得している。「江別港」とは、江別に在学する四大学・約 1 万人の大学生と、彼らを必要とする様々な地域、活動現場をつなぐための「仕組み」を作るプロジェクトで、その象徴であり実際に顔を合わせて多くの方々が出会う場として、その名も「江別港」という活動拠点を大麻銀座商店街内に構え、活動を展開している。大切になるのは、「必ず誰かと出会う」という信頼感で、「会えるかも」ではなく「必ず」誰かに出会えるからこそ、時間をかけてでも行く価値が作れる<sup>xxii</sup>としている。

### ② 高齢者・認知症カフェ

#### □カフェスマイル

介護老人福祉施設「静苑ホーム」(江別市新栄台)の1階、喫茶室にて毎月第3火曜日13時30分～15時まで実施している。参加申込は不要で参加可能人数は30名程度、参加費用は無料<sup>xxiii</sup>となっている。

#### □認知症カフェゆうあい

グループホームゆうあい(江別市豊幌美咲町)の交流ホールで毎月第1金曜日14時00分～15時30分に行っている。参加申込は不要で30人程度まで参加が可能となっており、費用は100円(飲み物代)で参加することができる。月毎に地域包括支援センターによる介護予防教室・地域ボランティアによる音楽等のイベントを実施<sup>xxiv</sup>している。

#### □ケアラーズカフェえべつ

介護者と支援者の地域ネットワークえべつケアラーズが主催し、江別市総合社会福祉センターで行っている。開催日時は毎月第2水曜日、第4日曜日、9時30分～12時で参加申込は不要、定員なし、参加費用は100円である。特長としては認知症の状態にある当事者の方とご家族はもちろんのこと、要介護状態にある方やそのご家族、障がいをお持ちの方やそのご家族、子育てをしている親など、「どなたかを支えている人」が息を抜ける場所で、『大切な人を支えている「あなた」も大切です』<sup>xxv</sup>としている。

### ③ 全世代対象型

江別市内にすべての方を対象とする居場所は見当たらなかった。

#### (3) アセスメント結果

江別市は大都市である札幌のベッドタウンでもあり、土地の高低差がなく天候の問題がなければ子どもからお年寄りまで歩行可能な住みやすい地域だといえる。しかしバスでの移動が快適にできるかという、路線や本数が削減され生活には自家用車の使用が必要な地域であり、子どもと高齢者にとっては移動が課題となっている。また積雪が多いため、高齢者のためのサークルや活動は冬期間(1月～3月)は転倒予防のために休止され、その間の高齢者の生活が家に閉じこもりがちになると言われていて、ここにも課題があると考えられる。江別市の高齢化率が少しずつ増加していることから、転倒の心配がないように自宅近くまで送迎バスを利用できるようにするなどの参加・交流の機会を図るアクセシビリティの保障への工夫の必要があるだろう。

江別市内の「居場所」の状況から子どもが自由に徒歩で遊びに行くことができる状況を保障するためには、児童センターが少ないことが課題としてあげられる。また全国的にみれば増加しつつある「子ども食堂」も休止してしまうなど、他地域と比較して「食」を通して交流する場が江別市内には少ないことが分かった。

なお、高齢者が気軽に集える「場」も用意されていない。「認知症カフェ」はその名称からもある状態になった方を対象としていることは明らかでその存在意義は十分に評価できるものの、その状態まではいかない高齢者たちが参加することも考えにくい。「居場所」ではないため前述のアセスメント結果には記述していないが、江別市の自治会には「愛のふれあい交流事業・地域交流のつどい活動」を年に1回以上実施するという実績がある。この活動自体は自治会の自主活動であり、非常に評価すべき交流を図るイベントの実践となっている。しかしながら、「居場所」というのは少なくとも月1回程度は行われ、かつ継続性が重要となってくる。自治会は役員を含め地域住民が交代で担うものとなっていて、この事業は単発のイベントであるため「居場所」に発展していく可能性は考えにくい。「愛のふれあい交流事業」を支援してきたという経緯があるためか、江別市社会福祉協議会では全国的に取り組みられてきた「ふれあいいいききサロン」活動は行っていない。全国の多くの地域で「ふれあいいいききサロン」からさまざまな事業やサービスが展開してきたことを考えると、重要な一つの機会を逸しているともいえる。「ふれあいいいききサロン」でなくとも構わないが、「居場所づくり」につながる取り組みを改めて実施すべき時期に来ていると考えられる。

つまり、現時点で江別市内には「すべての住民が利用できる居場所」がないと言っても過言ではない。対象を特定し、その方々にとって重要な要素を盛り込んだ活動は魅力的なものとなる。本来、地域にはさまざまな活動があって、地域住民が自由に、柔軟に選択することが可能な状況が望ましい。しかし地域住民がさまざまなように、「誰でも歓迎してくれる」、そんな来場者を限定しない居場所が複数、あらゆる地域に存在することがあるべき姿だと考えられる。

## 4. 研究課題の抽出 ～地域アセスメントの結果から～

江別市の地域アセスメントの結果から、江別市で必要とされているすべての地域住民を対象とした居場所づくりを試み、そこに地域住民にも積極的な関与をいただけるよう推進していく取り組みを行うことを研究課題とする。なお、本学の学生を活動に参加をさせることで多世代の交流を実現することと、学生たちが地域住民との関わりによって大人とのコミュニケーションの仕方や付き合い方、子どもとの関わりで大人としての責任感や立場等を学習するという側面も期待することにしたい。

なお、本来は歩くのに良い季節は「徒歩圏」に気軽に集まれる居場所があるべきことから、第一の居場所づくりを試みた後には、各地域に居場所を設置するための方法やプロセスについても研究を進展させていきたいと考えている。

## 5. 研究(実践)課題

研究(実践)課題—1 地域住民の「居場所」を実際につくり、居場所の必要性を住民と共有する



- 研究(実践)課題—2 地域住民が自らも居場所をつくることのできるような仕組みを考える  
 研究(実践)課題—3 居場所づくりを普遍化するための方法を構築する

## 6. 研究(実践)計画

本研究は1年間の単年度事業であるため、計画を検討している段階で「研究(実践)課題—3 居場所づくりを普遍化するための方法を構築する」は継続的な課題とすることが決定された。そのため以下の計画は課題—1および課題2を対象として作成した。

時期	内容
6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関係機関への挨拶、情報収集</li> <li>・文献調査、地域アセスメント実施、先行事例の視察および結果の共有</li> <li>・研究(実践)の構想まとめ、実践の企画</li> <li>・研究計画作り</li> </ul>
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研修(居場所事業の周知・学習の場)実施</li> <li>・実践の準備～実施</li> <li>・広報活動</li> </ul>
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究(実践)結果のまとめと検討</li> <li>・研究報告作成</li> </ul>

## 7. 研究・実践実施

### (1) 準備

#### ① 文献・資料からの学習(主なもの)

文献:NPO法人豊島子ども WAKU WAKU ネットワーク(2016)『子ども食堂をつくらう！ 人がつながる地域の居場所づくり』

・一般書としては企画意図やその意義、実際の子どもの食堂づくりのノウハウや実践を考える際に悩みそうなQ & Aを含み、取り組んでみたい住民に分かりやすく解説する文献であり示唆に富んでいた。

資料:湯浅誠(社会活動家・法政大学教授) Yahoo ニュース『『こども食堂』の混乱、誤解、戸惑いを整理し、今後の展望を開く』(<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20161016-00063123/>)

湯浅氏は定義も枠組みもないまま増加を続ける子ども食堂の類型化を試みている。

その中では縦軸をビジョンとして「地域づくり型」コミュニティ志向と「ケースワーク型」個別対応志向を置き、横軸が対象で「ターゲット限定」貧困対策型と「ターゲット非限定」ユニバーサル型、共生型とする。それぞれにABCDを振るとBが「地域づくり・コミュニティ志向」×「ターゲット非限定」ユニバーサル型、共生型で「子ども食堂は交流の場」という認識のグループ、Dが「ケースワーク型・個別対応志向」×「ターゲット限定・貧困対策型」で「子ども食堂は課題を発見する場」として機能する。

本研究(実践)プロジェクトはこの類型によれば完全にBの「地域づくり・コミュニティ志向」×「ターゲット非限定・ユニバーサル型、共生型」で「子ども食堂は交流の場」という認識で取り組むものである。しかし、貧困対策型を否定するものではなく、課題が発見された場合には適切な対応を取ることも必要だとの認識である。

#### ② 関係機関への挨拶と居場所づくりに関わる情報収集等

本研究(実践)事業での居場所づくりについてのご意見や助言をいただくためなどに関係機関に赴いた。

日時	関係機関
8月23日	江別市介護保険課
8月30日	江別市社会福祉協議会

9月 5日	江別市民生委員児童委員連絡協議会
9月 8日	江別市高齢者クラブ連合会
9月25日	江別市地域包括支援センター長会議
10月12日	江別市都市と農村の交流センターえみくる
10月27日	江別市介護保険課
〃	江別市社会福祉協議会
11月 2日	江別市民生委員児童委員連絡協議会

### ③ 子ども食堂・地域食堂、地域の居場所の視察

各教員が子ども食堂・地域食堂または居場所等に視察に行き、その内容を報告し合って学習・検討を行った。視察先の実施目的は特に統一せず、多様性も含めて行うこととした。その際に共通して報告されたのは「場所選択が開始するための一番の困難」「初期費用など始める準備が大変」「開始してみると様々な協力が得られるものだった」等であった。なお、各所の状況報告は別添資料を参照していただきたい。

時期	視察先	添付資料番号
9月13日(水)	あだち子ども食堂	1
9月14日(木)	椎名町子ども食堂	2
9月15日(金)	こまじいの家(居場所・多機能、毎日型)	3
9月15日(金)	さきちゃん家(子ども食堂)	4
10月 2日(月)	江別市高齢者クラブ「早苗クラブ」(モデル事業指定)	5
10月23日(月)	妹背牛町「わかち愛食堂」(地域食堂)	6
11月 5日(日)	苫小牧「木と風の香り」	7
11月17日(金)	子ども食堂キタクマ	8

以上の視察および検討を行った上で、本研究・実践プロジェクトで行う企画を決定した。

### ④ 企画決定「子ども食堂・地域食堂」の実施

(趣旨)

地域住民が担う支え合いの拠点、すなわち居場所づくりを支援する事業を実施したいと考えている。対象は要介護高齢者などの属性ではなく住民全員としている。昔から「同じ釜の飯を食う」といって、同じ食卓を囲むことは仲間づくりに有効だとされてきた。そのため共にお茶を飲み食事をする「場」を作り、そこでの経験を共有していただくことにより「居場所」の有効性を感じてもらおう。さらにこの事業を進めていく中で、地域住民の方々のご協力をいただき、住民たちが担い手となっていけるように支援を行っていく。

「子ども食堂」という名称は全国的に広がりを見せているという実績があり、地域住民誰にとっても親しみやすい名称であることで選択した。また「地域食堂」は子ども以外の「誰でも参加してほしい」という意味を強調するために、子ども食堂も実際には地域住民の居場所となっている実績はあるものの、大人が来づらいと遠慮することを考慮に入れて「子ども食堂・地域食堂」と2つの名称にしている。この名称は当分の仮名称であり、今後住民と共に愛称を検討していくことを予定している。

(子ども食堂・地域食堂の実施方法)

とき:毎月第3水曜日(開始12月※1)

○カフェタイム(無料) 15時30分～17時30分

○食事タイム(有料) 17時30分～19時位(撤収・終了20時30分)

場所:野幌地域(※2)の公共施設

提供数:50食程度

参加対象:どなたでも(対象を限定しない)

参加費:大人300円、子ども無料、ただしカフェタイムのみの参加者は無料

スタッフ:当初は北翔大学本プロジェクト教員および学生、後には地域住民の参加を募る予定

必要物品(材料):食材および食器、紙風船や折り紙等の玩具など

※1 開始を12月としたのは、当初1月より実践する予定であったが、降雪により高齢者のサークル等は外出困難によって12月で終了することが判明したためである。

※2 野幌地域での開催としたのは、江別市の中心地域であることと大学からのアクセスがしやすい場所だという理由による。

### ⑤居場所づくりのための研修実施 (添付資料番号9)

(趣旨)

超高齢化社会の到来や子育て家庭の基盤の脆弱化の進行が指摘される今こそ、子育てや高齢者の支援まで、頼りになりお互いに支え合って暮らしていけるような、かつて日本にあった「地域社会」がどの地域にも存在することが望まれる。しかし、このような支え合いの必要性は皆が感じていても、私たちは自分の家族や友人、同僚や日頃付き合っている仲間といった一定の人間関係の中で暮らしていて、にわかに近隣の人間関係を始める一歩が踏み出せないところにいる。

今回はその一つ、全国からの視察に追われる東京都文京区の「こまじいのうち」の実践を紹介し、地域の居場所をどのように作っていくのかという考え方やノウハウを実際にサポートしてきた社会福祉協議会の地域福祉コーディネーターから教示を受ける研修会を行う。

(研修日時・場所)

日時 2017(平成29)年11月29日(水)18時～20時

場所 北翔大学 7号棟3階 733教室

(対象者)居場所づくりに関心のある関係者(行政、社会福祉協議会、地域包括支援センター、民生委員・児童委員等)に周知した。

(内容)

研修会「地域の居場所の作り方」(仮題)

1. 「こまじいのうち」の実践報告 NPO法人居場所コム代表理事、こまじいのうちマスター 秋元康雄

2. 社会福祉協議会による居場所づくりの支援と方法

社会福祉法人 文京区社会福祉協議会地域福祉推進係

駒込地区 地域福祉コーディネーター 浦田 愛

(参加者・アンケート結果からの考察)

江別市役所職員、江別市社会福祉協議会職員、民生委員・児童委員、本学教員・学生を含め31名の参加を得て研修を実施した。

受講者を基本的に初学者ではなく行政や地域包括、民生委員等に限ったため、実際に行われている極めて実践的な要素を、しかも単なる実践報告だけではなく整理して伝えていたことが理解できていたようであった。アンケートからは、居場所づくりについて、このような実際の取り組みを整理した内容を聞くことは中々なかった等、非常に評価の高い研修だと感じられるものだった。受講者は居場所づくりを現在している、もしくは今後実施する予定がある人が多く、こうした段階の対象者をターゲットにした研修の必要性が理解できた。

質疑応答の結果からは「失敗してもやってみればいいのだ」「できる気持ちにさせてもらった」という喜びのメッセージも聞かれ、広く地域住民対象として実施しても良かったとの意見も寄せられた。

### ⑤ 広報活動

江別市の広報ツールとしてアセスメントでも取り上げた「まんまる新聞」は、その後江別市民生委員児童委員連絡会の会議時にも「重要な周知ツールだから掲載できるか連絡した方がよい」との助言を受け、記事として掲載できるかどうかの打診をし12月21日初回実施前に記事を掲載していただくことができた。また、北海道新聞江別版にもイベント実施が紹介された。さらに北海道新聞社江別市内の販売店に新聞折り込みや新聞を取っていない世帯への配布を依頼した。その他、野幌公会堂近くの集合住宅に、実施日の数日前にポスティングを行っている。江別市役所の介護保険課および子育て支援課、そして社会福祉協議会等にチラシを持参して各回周知を依頼した。

初回(12月21日)実施後および1月、3月の実施後に北海道新聞江別版にイベントの紹介記事が掲載され、その際に次回開催を入れていただけたことも広報活動となっていた。

### ⑥ オモチャ等の寄贈の依頼

本学教職員を対象としてゲームやおモチャ等の寄贈を呼び掛けたところ、予想を上回る人数からクリスマスツリーや絵本まで、「もう使わないけれども思い出があって捨てられないものを使ってもらえるのはうれしい」と快く反応していただき多くの寄贈を受けた。新しいものを購入する余裕はなかったため有り難いものとなった。

### (2)「子ども食堂・地域食堂」の実施

12月から3月までの4回、下記のように子ども食堂・地域食堂を実施した。各回のばらつきはあるが、各回30食前後を提供し、概ね50名前後の参加者を得た。子どもから高齢者まで幅広い年齢層の参加者が来場し、中には手作りの折り紙で作った箱やラミネートシートで折り紙をバックしたランチョンマットを子どもたちにあげてほしいと持参される住民の方々もいた。

行政職員より「各回何か簡単な企画があった方が来場の動機付けになる」と助言いただき実施してきた。

開催日	企画	会場	来場者数	スタッフ数
12月20日 (添付資料10)	クリスマス・クッキーデコレーションに チャレンジする 食事:そぼろ丼	野幌公会堂	57名	教員 7名 学生10名
1月17日 (添付資料11)	お手玉で遊ぶ 食事:おからバーグお好み焼き風	〃	55名	教員 5名 学生 9名
2月21日 (添付資料12)	けん玉で遊ぶ 食事:ハヤシライス	〃	50名	教員 7名 学生10名
3月21日 (添付資料13)	あやとりで遊ぶ (昼食):炊き込みご飯とポトフ	8丁目プラザのつぼ	42名	教員 7名 学生11名

スタッフとして参加する学生たちには事前に時間を取って趣旨や内容、運営や当日の流れ等を説明した。実施後に時間が取れる際には「部屋の中の動線が悪い」「子ども用の飲み物がない」等の次回への反省点を指摘してもらって、改善につなげるという試みを実施している。

さらに食堂を実施している期間中に、手元にある野菜を寄付したいとの申し出があった。1月に個人の家庭菜園で作った野菜の備蓄からカボチャを頂き、1月17日にメニューを変更してカボチャの煮付けを小鉢として提供した。3月には使用しなくなった有機野菜を無料で頂戴し、3月21日のポトフに玉ねぎを使用した。

このように江別市内の住民などからご協力の申し出があり、食材や経費の不足を助けていただくことができた。

## 8. 研究・実践の結果および評価

### (1) 研究・実践の結果

#### 研究(実践)課題—1 地域住民の「居場所」を実際につくり、居場所の必要性を住民と共有する

これまでに4回子ども食堂・地域食堂を実施し、事前申込のないイベントゆえに「誰も来ないかもしれない」と不安を口にする教員もいたが、広報の成果か初回から開始の15時30分より前に来場される住民がいたように気が付けば毎回盛況となっていた。初回に参加してくれた方がその後毎回来てくれる方、仕事帰りに子どもを連れて寄って下さる母親や会場で待ち合せて夕食を食べてゆっくりして皆で帰っていくご家族など、子ども食堂・地域食堂を使いこなし始めている様子も見られた。

#### 研究(実践)課題—2 地域住民が自らも居場所をつくることのできるような仕組みを考える

取り組み回数が浅いことなどの時間的制約もあって実施することができなかった。

### (2) 評価

本来の評価は客観的なアンケート調査等を用いて行うものであるが、実践が4回と短いものであったため調査は行わなかった。そのため研究(実践)課題ごと、およびその他項目別に本研究プロジェクト運営担当と子ども食堂・地域食堂スタッフである教員および参加学生のコメントにより評価をしてみることにする。

研究(実践)課題1 地域住民の「居場所」を実際につくり、居場所の必要性を住民と共有する、に関しては一定の利用住民の利用を得られて継続が可能となっていて、地域住民にも受け入れられていることが伺える。しかし居場所の必要性を住民と共有するという表現までには到達しておらず、ニーズを顕在化することはできていないことが明らかである。

その他、各回の参加者の中に自らも子ども食堂(または地域食堂)を立ち上げたいと考えている方たちが複数存在し、見学・視察やまた話を聞きに来てくれた方々がいた。子ども食堂・地域食堂に参加した後に本学に立上げグループで話を聞きに来てくれた方もあった。また実際に初回に利用者や児童を連れてカフェタイムに来てくれた組織が、後日、自らの事業に加えて地域食堂を開始することになったことを聞き及んだ。このことから、一つの動機付けなり実践する刺激の一つとなったのではないかと考えられ、これは課題1の後半の「居場所の必要性を住民と共有する」ことができた証でもあると言えるだろう。

以下、課題1への教員たちのコメントを紹介する。

### 研究(実践)課題1 地域住民の「居場所」を実際につくり、居場所の必要性を住民と共有する (成果)

- ・本事業を通じて意外と多くの方が、江別市内(野幌地区)においても「誰もが自由に集える居場所」を求めていることがわかった。このような居場所は、年代や性別を問わず交流ができ、自由に過ごすことができる。この取り組みは、感覚的なものではあるが、大きな期待を抱いて参加者に受け入れられているように感じられた。
- ・毎回一定数の参加者を得ることができ、このような地域でのつながりの場、他者との交流の場が求められていることがわかった。
- ・3月に場所を移転してもリピーターが何組もあり、一定程度定着したと考えられるのではないかと。
- ・親子で来場してくれる方も多く、同年代の子ども達と親が交流する機会を提供できた。
- ・会場で知り合った 年配の方同士で話している様子がみられ、ある程度地域住民同士の交流の場とすることができた。
- ・学生が子ども達と関わる中で、良きおにいさん、おねえさんの役割を果たせた。
- ・学生が食堂運営に関わることで、学業とは異なる能力を発揮できたり、運営力を養うことができた。
- ・食堂そのものの運営はある程度軌道に乗せられた(気がする)。
- ・昨年12月の第一回開催から継続的に参加してくれる親子が複数いる。その中には徒歩圏以外の地域から来られる方もいて、本取り組みのような場に対するニーズがあることが明らかになったと言える。
- ・とても有意義であると改めて感じた。同年代であっても通常は限られた関係性の中でくらししているが、食堂にくることで新しい出会いや交流が生まれ、それが楽しみとなり、より生活が豊かになると期待できる。
- ・視察・インタビューを基にした「まずはやってみる」ことの重要性  
子ども食堂、地域食堂を実践するためには、さまざまな準備が必要ではある。しかしながら、「やってみよう」という気持ちから、まずは実践や取り組みをスタートさせることが重要である。さらに、運営は子ども食堂、地域食堂を手伝ってくれる仲間とともに、頭の中での構想や机上論ではなく、まず始めてみてから参加者と共に作り上げていくプロセスを共有することが、子ども食堂、地域食堂の立ち上げ、萌芽期においては何よりも大切な第一歩と考えられた。
- ・参加者と共に「子ども食堂、地域食堂(居場所)の意義」を共有することができた  
これまでの4回の実践から、「子ども食堂、地域食堂(居場所)の意義」を参加者と共に共有できたことである。リピーターの数組の親子など、参加者個人々人によって参加意義や理由は異なる。しかし、子ども食堂、地域食堂に集うことで会話が生まれ、少しずつ新たな人間関係を構築していくことも参加者にとっては興味深く感じられてきているように思われる。さらに、リピーター層が友人、知人に子ども食堂、地域食堂を紹介し、参加してもらえるような居場所に変化しつつある。

### (課題)

・継続的に開催できる場、担い手、財源の確保に課題を感じた。地域の方、関係組織の方の理解および協力を得られなければ継続的な活動は難しいと感じる。しかし上述のようにニーズがあることが明らかになりつつある以上、市内一か所のみならず他の地域でも開催されることが望ましいともいえる。新規開催の度に同様の課題が浮上するため、子ども食堂・地域食堂の実践を誰でも始められるような仕組みの検討が必要ではないかと考えた。

・場所、運営資金、運営組織について

定期的かつ継続的に開催するためには、場所と運営資金の確保は不可欠である。子ども食堂、地域食堂の実践を行う際に最も重要な課題となる。また、地域住民なども交えて運営を行っていくための組織作りや体制の整備、協力者も今後の課題となる。

・運営スタッフについて、スタッフ間の意思疎通、理念の共有は不可欠である。

・参加者間の交流

萌芽期の子ども食堂、地域食堂では、スタッフも含めて何らかの仕組みや仕掛けがなければ、参加者間の交流は難しいと感じた。

・開催頻度、時間

現在は毎月第3水曜日の月1回の開催であるが、この頻度や開催時間の妥当性について検討する必要があると思われる。

・食事をする場としてのリスク管理。ケガや食中毒などへの対応をどのように行うのかが課題だと思われる。

・住民同士の交流の促進。特に異世代間の交流が少ないので働きかけが必要。場所が変わって限られた(狭い)空間なので、今後期待できる。

・学生と住民との交流をもっと促進できると良い。

・待っている人の対策が必要である。

・参加している人にはその必要性が見て感じられても、参加していない人への説得力に欠けている。

### 研究(実践)課題—2 地域住民が自らも居場所をつくることのできるような仕組みを考える

・住民の主体的な活動へ結びつけることはまだまだ時間がかかる。

(その他:実践に取り組んで教員が得たこと)

・全国的に急増している子ども食堂が、実際に地域に求められている事実を実践的に知ることができた。

・子ども食堂・地域食堂という取り組みに関心のある住民が少なくはないということを知った。直接食堂に参加しなくても、何らかの関わりを必要としている住民は多数いるのではないかと感じている。

・これまであまり関わったことのない学生と密にかかわり、個々の学生への理解が進んだ。

・経験したことのない大人数の調理の一部を担当し、そのスキルが得られた。

・たわいもない話ができる人が、増えたことである。一緒にお茶を飲みながら、家族や友人ではないが、自分が話したいことを自由に話すことができ、普段の日常生活とは異なる空間で一緒に時間を過ごす経験は、現代社会において得がたい貴重な経験となった。

## 9. 残された課題

取り組むことができなかった研究(実践)課題—2 地域住民が自らも居場所をつくることのできるような仕組みを考える、および研究(実践)課題—3 居場所づくりを普遍化するための方法を構築する、の2つは残された課題である。また、住民の主体性をどう引き出すか、主体的な取り組みにどうつなげていくかを検討することが課題だと考えた。まずは実践することから始めたため、先駆的な実践をしている方や団体への視察、インタビューの内容を精査することが課題の一つである。また、実践知から得られた内容を踏まえ、研究の観点からデータ収集、分析を行い、子ども食堂、地域食堂(居場所づくり)を開設から運営に至るまでの理論化も今後の課題となる。

## おわりに

まず、本研究に取り組むきっかけを与えてくれた江別市に感謝を述べたい。1 年目は実践優位の結果に終わったとはいえ、地域社会の抱える支え合いの再構築という重要課題に取り組むチャンスをいただけたのは、介護福祉士および社会福祉士養成を担う教員にとって稀有で有り難い経験であった。さらに、本研究に当たって非常に有用な助言や情報を下さった関係機関の皆さまにも感謝を伝えたい。「考えすぎずにまずはやってみること」という取り組み姿勢から、会場の選定や広報ツールなど地域を良く知る方々の助言によって実践が進んだことは確かである。

また教育を担う大学としては、大学生にとって非常に貴重な経験ができる学習の場であると同時に、地域の方に本学の学生と交流をしていただくことで「居住地域にある大学はこんなところ」というイメージを少しでも持っていただくことにつながると考えられた。学生は、地域の方と話をすることで江別市がどのような地域かを学び、考えるきっかけにもなる。その経験、学びの中から、将来は江別に貢献したいという学生も出てくると考えられるため、学生に江別市の地域住民および社会資源について知ってもらいよいきっかけにもなり、将来の担い手としての人材育成にも貢献出来得る本取り組みを今後も継続的にかつ拡大させて行っていくことが望ましいのではないかと考えた。

---

i 厚生労働省「我が事丸ごとの地域づくりについて」

<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyo/kyokushougai/hoken/fukushibu-Kikaku/0000153276.pdf#search=%27%E6%88%91%E3%81%8C%E3%81%94%E3%81%A8%27>

ii 井岡勉 (2008)「地域福祉とは何か」『州民主体の地域福祉』法律文化社。

iii 柴田謙治 (2009)『地域福祉』ミネルヴァ書房。

iv 市民という概念も社会への責任を担う近代的市民像として地域、地域社会、コミュニティを語る上では使用される場所である。しかし本研究の中では住民、もしくは地域住民という表現を社会への責任を担う市民という内容も持ち合わせる可能性もあり、また個人生活に集中している人という可変性も持ち合わせる人間存在として使用する。

v 牧里毎治 (2013)「住民・市民参加の地域福祉の時代」『ビギナーズ地域福祉』有斐閣。

vi 原田正樹 (2012)「地域住民の参加と協働」『地域福祉援助をつかむ』有斐閣。

vii 秋貞由美子 (2014)「住民参加の諸形態」『地域福祉の理論と方法』ミネルヴァ書房。

viii 「ふれあいいいききサロン」地域福祉・ボランティア情報ネットワーク全国社会福祉協議会ホームページ

<https://www.zcwvc.net/%E7%A4%BE%E5%8D%94%E3%81%AE%E6%8F%90%E6%A1%88%E3%81%99%E3%82%8B%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E7%A6%8F%E7%A5%89%E6%B4%BB%E5%8B%95-%E4%BA%8B%E6%A5%AD/>

ix 杉岡直人・畠山明子 (2016)「地域食堂の活動と類型化に関する一考察」北星学園大学社会福祉学部北星論集第 53 号。

x コミュニティワークは地域福祉の方法とされてきた。

xi 「江別の歴史」江別市ホームページ <https://www.city.ebetsu.hokkaido.jp/soshiki/koucho/7644.html>

xii 江別市都市計画マスタープラン 2014 (改訂版)「第 5 章地域別構想」

<https://www.city.ebetsu.hokkaido.jp/uploaded/attachment/11319.pdf#search=%27%E6%B1%9F%E5%88%A5%E5%B8%82++E8%A1%8C%E6%94%BF%E3%81%AB%E3%82%88%E3%82%8B%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E3%81%AE%E5%88%86%E3%81%91%E6%96%B9%27>

xiii 北海道江別市 (2018)「地勢および地質」『2018 江別市統計書』No.53 江別市企画政策部企画課。

xiv 同上「気象」

xv 同上「事業所」

xvi 同上「住宅の種類」

xvii 札幌市 平成 25 年「住宅・土地統計調査」結果の概要 「住宅・土地統計調査」結果の概要 札幌市長政策室企画部課

---

[https://www.city.sapporo.jp/toukei/tokusyuu/documents/h25house\\_1.pdf#search=%27%E6%9C%AD%E5%B9%8C%E5%B8%82+%E6%8C%81%E5%AE%B6%E7%8E%87%27](https://www.city.sapporo.jp/toukei/tokusyuu/documents/h25house_1.pdf#search=%27%E6%9C%AD%E5%B9%8C%E5%B8%82+%E6%8C%81%E5%AE%B6%E7%8E%87%27)

xviii 同上「車種別自動車保有台数」

xix 同上「年齢別・男女別人口」

xx 同上「自治会結成状況、高齢者クラブ連合会の状況」

xxi まんまる新聞ホームページ <http://manmaru-sinbun.com/>

xxii 江別港 <https://faavo.jp/hokkaido/project/279>

xxiii 江別市ホームページ「認知症カフェ」<https://www.city.ebetsu.hokkaido.jp/soshiki/kaigo/51911.html>

xxiv 同上

xxv 同上 <https://www.city.ebetsu.hokkaido.jp/soshiki/kaigo/51911.html>